

聖霊シリーズ「憐れみの賜物」

1A 神の憐れみの深さ

1B 天のような高さ

2B 義なる神の憐れみ

3B 私たちに歪められた御姿

4B 仕返しを望む肉

2A 賜物としての憐れみ

1B 喜びをもった憐れみ

2B 一体化した憐れみ

3A 憐れみの神と罪の赦し

1B 神の赦しによる人への赦し

2B 主の命令

3B 御霊の力

本文

私たちの聖霊シリーズの学びは、おそらく今晚を入れてあと二回になります。今晚は「憐れみの賜物」について取り組んでみたいと思います。「ローマ 12:8 **勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。**」「慈善を行なう」とありますが、単純に「憐れみを示す」と訳すことができます。人をかわいそうに思い、その深い思いから良い行いをするという意味で、単なる慈善行為以上の意味が含まれています。

1A 神の憐れみの深さ

1B 天のような高さ

この賜物は、神のご性質の内、その中心部分に位置するご性質に触れています。詩篇 36 篇 5-6 節にはこう書いてあります。「主よ。あなたの恵みは天にあり、あなたの真実は雲にまで及びます。あなたの義は高くそびえる山のように、あなたのさばきは深い海のように。」新改訳の「恵み」と訳されているヘブル語はヘセドであり、新共同訳や口語訳では「慈しみ」と訳されており、英訳でも憐れみを示す”mercy”が使われています。同じく詩篇 103 篇 11 節には、「天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。」とあります。神の慈しみは、実に天のように高いです。神の正義については、高いところにありますがそれでも、そびえる山のような高さであり、天に及ぶことはありません。

つまり、ここで言っていることは、神のご性質として、神は義なる方であり、裁かれる方ですが、それ以上に神は憐れみという動機によって動いておられるということです。そして天にあるのです

から、神の憐れみは、人々の思いをはるかに超えているということであり、神の御座そのものから出ているものであり、永久に続いていることも示しています。

2B 義なる神の憐れみ

神の憐れみは、創世記の初めから始まっています。主がアダムとエバを造られました、そしてアダムには、「善悪の知識の木の実から取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。(創世 3:17)」と言われました。しかし、取って食べました。しかし、神はその後に、彼を探すかのようにエデンの園を歩かれ、彼が罪を犯したけれども、皮の衣を与え、そしてエデンの園の外においてもアダムとエバに心を留めておられて、子どもを与えられました。神は罪に対しては死という義を持っておられる方ですが、罪を犯しているのに、その罪を贖うためのあらゆる手を尽くしておられるという憐れみを持っておられる方なのです。

しばしば、「アダムが罪を犯すことを分かっているなら、そもそもアダムを造られなければよいではないか。」という意見を聞きます。それは、神のとてつもない大きな、憐れみのゆえなのです。死んで滅んでもよいのに、罪を犯すことを知っておられながら彼を造られ、なおキリストの贖いに至るまで彼の子孫に付きあっておられるのです。

ノアの時代もそうでした。人々が悪にしか傾いていなかったにも関わらず、神はなおも百二十年待って、裁くことを控えておられました。そして、ご自分の恵みによってノアとその家族八人に心を留められて、彼らのご自身を信じるようにしてくださり、その信仰によって義と認め、彼らを救ってくださったのです。そして、洪水の後に、「創世 8:21 わたしは、決して再び人のゆえに、この地をのろうことはすまい。人の心の思い計ることは、初めから悪であるからだ。わたしは、決して再び、わたしがしたように、すべての生き物を打ち滅ぼすことはすまい。」とまで言われました。初めから悪であるから、憐れみによって接していくとお決めになったのです。

それから、アブラハムにも神の憐れみは現れていました。ソドムとゴモラを滅ぼされる時も、なんと十人の正しい人がいたら、町全体を赦すとされました。神は義を放棄されていません、確かにその不義に対して裁かれるのですが、神はその憐れみのゆえ怒るに遅い方なのです。そしてヤコブに対してはどうでしょうか？彼の名が「かかとをつかむ者」というごとく、エサウの長子の権利を彼の空腹という弱さを掴んで、自分のものとししました。ところが、主はマラキ書で「わたしは、ヤコブを愛し、エサウを憎む。」と言われたのです。私たちの正しい基準で判断すれば、ヤコブに対して偏愛しているのではないか、と思うかもしれませんが、ここに神の憐れみが鮮やかに出ています。神はヤコブが良いことをしたから愛しておられるのではなく、彼をただ憐れんで、愛しておられるのです。

そして、主はイスラエルの民が金の子牛を拝むという罪を、モーセの時に犯しました。彼らをすべて滅ぼしても、その義にしたがえば当たり前のことであつたのに、それでも主は、モーセの執り成し

を聞かれました。そして、ご自身の御名を彼に明らかにされました。「出エジプト 34:6-7 主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」主の本質は、憐れみなのです。

そして、聖書の至るところに、主の憐れみが明らかにされています。主が憐れみを喜んでおられることを、ミカを通して語られています。「7:18 あなたのような神が、ほかにあるでしょうか。あなたは、咎を赦し、ご自分のものである残りの者のために、そむきの罪を見過ごされ、怒りをいつまでも持ち続けず、いつくしみを喜ばれるからです。」バビロンが滅んだ後に、預言者エレミヤが言いました。「哀歌 3:22 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」バビロンの捕囚の地でダニエルが祈りました。「9:9 あわれみと赦しとは、私たちの神、主のものです。これは私たちが神にそむいたからです。」エルサレムへの帰還民は、こう祈りました。「ネヘミヤ 9:31 しかし、あなたは大きいなるあわれみをかけて、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らを捨てられませんでした。あなたは、情け深く、あわれみ深い神でありますから。」そして神殿での賛美は次のようなものです。「詩篇 100:5 主はいつくしみ深くその恵みはとこしえまで、その真実は代々に至る。」

そして新約聖書でも、数多く神の憐れみが書かれています。「2コリント 1:3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。」

3B 私たちに歪められた御姿

しかし、私たちは旧約聖書の神は恐ろしく、新約聖書の神は愛に満ちていると思ってしまいます。これは今まで読んだように、数多くの旧約聖書の箇所でも否定されています。異なる二つの神のように見えるのは、私たちの神に対する思いが間違っているからです。聖書に明らかにされている神の御姿を、自分の勝手な神に対する思い込みによって読んでいるからです。そして、新約聖書において、実は旧約聖書よりも厳しいということを知らないといけません。旧約における裁きは、地上における滅びが主なものです。しかし、イエス様は天の御国以上に、ゲヘナの滅びをより多く語られました。「マルコ 9:47-48 もし、あなたの目があなたのつまずきを引き起こすのなら、それをえぐり出しなさい。片目で神の国にはいるほうが、両目そろっていてゲヘナに投げ入れられるよりは、あなたにとってよいことです。そこでは、彼らを食ううじは、尽きることがなく、火は消えることはありません。」そして、ヘブル 10 章では、キリストを拒む者のほうが、モーセの時の裁きよりも厳しいことをはっきりと教えています(26-31 節)。そして黙示録には、主の激しい憤りが地上に下り、また永遠に燃えている火と硫黄の池に、不信者が投げ込まれることが書かれています。けれども、もちろん「ただで飲みなさい」と言われた主は、悔い改めご自身のところに来る者を受け入れ、すべての不義と罪を赦してくださいます。ですから、神は憐れみ深い方であられ、初めからそうだったのです。

私たちは、どうしても神が自分に敵対していると感じてしまいます。神が完全な方であられるので、自分のちょっとした過ちを重箱の隅を突くようにして調べられ、罪に定められるとってしまうのです。そして、何か悪いことが起こると、それは神が自分に怒っているからと感じてしまうのです。それで、聖書を読む時にもそのような神に対する偏見の目を向け、憐れんでおられる神が怒っておられると読み間違えます。しかし、主はこの上もなく憐れみに満ちた方で、その憐れみは天のように高いところから注がれ、私たちに良くしてくださる方なのです。この方に私たちは召されています。

4B 仕返しを望む肉

その一方で私たちは、仕返しがしたいと願っています。何か悪いことをされたら、その悪をもってその人に報いてやりたいと願います。神がそのようにされないので、どうしてそうしないのですか？と尋ねる時さえあります。自分に対しては、自分の行為について正当化してほしいと願いますが、自分に対しては憐れみを欲しいと願います。私たちは、そのままの姿ではこのようであり、ですから、私たちは聖霊の賜物が必要です。天からの憐れみ、その憐れみによって初めて憐れみ深くなることができます。自分の思いを十字架の前に持ってきます。「主よ、どうか私を憐れんでください。私が、この状況に対して憐れみ深くさせてください。私から復讐したいという心を、与えてください。」と祈ります。

2A 賜物としての憐れみ

1B 喜びをもった憐れみ

私たちは、憐れみというのが神からの賜物であると感じるのは、人々の憐れみの示し方です。人によっては、本当に憐れんでくれているのか分からないことがあるからです。憐れみの賜物を受けている人は、驚くべき赦しを行ないます。とんでもない罪を犯したのに、あっさり全て赦します。そして、それが二度、三度、繰り返してしまったのに、それでも赦します。それは決して、その罪を是認しているということではないのです。むしろその罪を悔い改めることを願って、それで赦すのです。その罪を犯した者が、その憐れみによって自分の罪が示されて、悔い改めに導かれます。主の慈しみこそが、人々を悔い改めに導くからです。

しかし、そうではない事があります。口では赦すと言ってはいるのですが、まだ心に苦みを持っているのではないかと思われる時があります。その後の行動で、やはり赦していないだろうと思われる時があります。基本的に和解していません。おそらく、赦さなければいけないと本人は思っているのですが、賜物として受け取っていないのです。それをお終いにする、土の中に埋めるのですが、いつでも取り出せるように浅いところに埋めています。

また、苦しみや悲しみの中にいる人々に、憐れみを示す時も賜物としての憐れみがあります。以前、勧めの賜物の時にお話しましたが、自分が苦しい時にメールで祈りの要請をしたら、数々の勧めの言葉が帰ってきたこと、それだけでなく慰めの言葉もあったことを話しました。その一つが、「実にそれはがっかりすることだ。」という一言でした。「がっかりすることだ」なんて言われたら、

なおのこと落ち込みそうですが、いいえ、むしろ慰められました。その言葉ではないのですね、霊が教えるのです。神の慈しみと慰めをもってその人が憐れんでいるのかどうかを教えてください。その反面、「ああ、かわいそうですね。」といって、悲しい表情を試みたり、いろいろなことをお手伝いしようとするのですが、かえってそのために冷静でいたのに、かえって悲しくなってしまうことがあります。

憐れみの賜物が必要だととても感じさせられる聖書の話は、ヨブ記です。ヨブの友人こそが、彼のことをよく思っていた人ですが、彼が生まれた日を呪うものですから、それで反応してしまって、彼のその苦しみは彼がまだ打ち明けていない何か、過ちがあるからだろうと勝手な推測を立てました。それに基づいて語るものですから、ヨブも剥きになり、ついに彼は三人に、「16:2 あなたがたはみな、煩わしい慰め手だ。」と言いました。私たちが慰めようとするほど、かえって相手を追い詰めることがあります。

けれども憐れみの賜物が与えられていると、ローマ 12 章 8 節にあるように「**喜んでそれをしなさい**」、すなわち喜びがあります。このように励ましてくれます。「そうだね、けれどもこのような状況の中にも主がおられる。主は何が起こっているかすべてご存知だし、そして私たちには分からないけれども、何かをしておられる。それは良い計画で、まだその渦中にいるから分からないけれども、主が戦ってください。」このように、相手に希望を与えます。「ローマ 5:5 この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

そして自分自身も、喜んで憐れみを示します。前回私たちは、分け与える賜物を学びましたが、それと同じです。主に捧げるというと、嫌々ながらという気持ちが働きますが、そうではなく、捧げたくてどうしようもない、うずうずしているぐらいの喜びと自主性があることを学びました。同じように、人に憐れみを示すことを喜んで行なう、そうした態度を持つのです。これは自分ではできません、ですから主からの助け、御霊の力が必要です。

2B 一体化した憐れみ

そして、憐れみには具体的な行動が伴います。ただ仕返しをしないということではありません。また困った人を見て、ただかわいそうに思うところで留まりません。「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかかわいそうに思われた。(マタイ 9:35-36)」イエス様は、群衆に対して弱り果てていることに、心から、いやギリシヤ語では腹の底から同情しておられました。それで、具体的な福音宣教、肉体の癒しの行為を行われたのです。憐れみには、このように気持ちでかわいそうと思うだけに留まりません。それ以上であり、共感して、同一化して、具体的な行動に移します。

そして人々は、イエス様にそのような憐れみを求めていました。盲人が叫びました、「ダビデの子よ。私をあわれんでください。(マタイ 10:47)」同じように、十人のらい病人もイエス様のところに来て、憐れんでくださいと叫びました(ルカ 17:13)。娘から悪霊を追い出してほしいと願った、カナンの女もそうでしたし(マタイ 15:22)、イエス様は具体的に苦しみに手を差し伸べたのです。ヤコブが手紙で、「あわれみは、さばきに向かって勝ち誇るのです。」と言った後に(2:13)、行ないのない信仰は死んだものだ、と言いました(17 節)。その例として、困っている人に対する行ないが書いてあります。「ヤコブ 2:15-16 もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい。」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。」

3A 憐れみの神と罪の赦し

1B 神の赦しによる人への赦し

そして憐れみを示すことは、自分自身の神からの憐れみにつながります。愛することもそうですが、神の愛に留まれば、必ず兄弟を愛します。兄弟を愛さなければ、その人は神の愛を持っていないし、神を知らないということを、使徒ヨハネは第一の手紙で話しました。同じように、憐れみも憐れむ人が、神の憐れみを受けます。「マタイ 5:7 あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。」これは、神から憐れみを受けることにはありません。自分が人を憐れむから、報いとして神から憐れんでいただく、ということではありません。そうではなく、神の憐れみの中に留まっていたいならば、人に対しても憐れみを示すことになる、ということの意味しています。分け与える賜物についても、そうでしたが、惜しみなく与える神を信じているならば、その恵みに留まっているならば、自分自身が人に分け与えることになる、ということです。

ですから、罪の赦しも同じです。「マタイ 6:12 私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。」そして、イエス様は続けて言われます。「6:14-15 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してくださいます。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。」天の父の赦しを知るには、人を赦すという神との交わりの中にいなければいけない、ということです。人を赦さないのであれば、神の赦しという憐れみの中に留まることができないということです。これは、救いの条件ではなく、神との交わりの問題です。

ですから、そのことを分かり易く喩えで話されたのが、あの借金の帳消しです。ペテロが兄弟を赦すのは七度までですかと尋ねたら、一万タラントの借金をしている僕の話をしました。この僕は憐れみを請いました。主人は、かわいそうに思って、借金を帳消しにしました。そうです、これは神の憐れみの姿です。一タラントは 6000 日分の労賃に値しますが、一万タラントですから、6 千万日分の労賃に相当します。ところが、この僕は、他に借りにあった仲間の僕、百デナリ、つまり 100 日分の借金を許せませんでした。それで主人は、彼を、借金を返済するまで獄吏に入れました。こ

のように、天の父はなさるとイエス様は言われました。ヤコブが手紙で言った通りです、「2:13 あわれみを示したことの無い者に対するさばきは、あわれみのないさばきです。」

このように、私たちに対する神の憐れみは、無尽蔵であり、罪の赦しはとんでもない祝福なのです。それを知ることが大事です。私たちはあまりにも豊かな憐れみなので、その豊かさに気づかない、悟らないで人を赦すことができません。ですから、どれだけの霊的な豊かさなのか、祝福なのかを聖霊によって示していただくことが必要です。

2B 主の命令

そして、憐れみは賜物であるからといって、ある人には憐れみの心を与えて、他の人には与えられないとして、憐れまなくてよいというものではありません。伝道者の賜物が与えられている人がいるけれども、全ての人がイエス様の証しをすることが命じられているのと同じように、全ての信者が憐れみを示すように命じられています。イエス様が命じられました。「ルカ 6:36 あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」そして、ミカを通して主は言われました。「6:8 人よ、何が善であり／主が何を前にお求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。(新共同訳)」ゼカリヤを通して言われました。「7:9-10 正義と真理に基づいて裁き／互いにいたわり合い、憐れみ深くあり、やもめ、みなしご／寄留者、貧しい者らを虐げず／互いに災いを心にたくらんではならない。」

3B 御霊の力

したがって、私たちは愛と憐れみの中に留まるのか、それとも他の人を赦せない、あるいは自己中心になって、他の人々を顧みない、こうしたことによって私たちは、神の愛と憐れみの中から敢えて自ら締め出すようなことをするか、そのどちらかであります。つまり、聖霊に満たされることが必要です。この方の憐れみと愛を自分に注いでくださることを祈り求めましょう。そして、自分自身がその器となるように、主の憐れみを押し流す管となるように祈りましょう。